

2020年5月17日 礼拝説教要旨

詩編講解説教15 「優等生の危険」

詩編15：1-5、マルコ10：17-22

今日は第15編が与えられました。多くの注解書が指摘しているのは、これは巡礼の旅人が礼拝のために神殿に入る際に、門のところで礼拝者としての資格を問われ、そしてこれに答えるという、言わば資格審査、口頭試問のようなものだという事です。1節「主よ、どのような人があなたの幕屋に宿り、聖なる山に住むことができるのでしょうか」と問いかけ、2節以下にその答えがあります。「それは、完全な道を歩き、正しいことを行う人。心には真実の言葉があり、舌には中傷をもたない人。友に災いをもたらず、親しい人を嘲けられない人。主の目にかなわない者は退け、主を畏れる人を尊び、悪事をしないとの誓いを守る人。金を貸しても利息を取らず、賄賂を受けて無実の人を陥れたりしない人」（2～5節）つまりそのような者が礼拝者として相応しいということです。それはまさしく正解であり、確かにこれだけの完璧な人間であれば、神さまの御前に申し分ないと言えるでしょう。しかし事柄がそれだけならば、「それはそうだろう」と納得して終わるだけのことであります。自分は大丈夫と思うか、あるいは自分は不合格だと思ってあきらめるかのどちらかです。果たして、今日の御言葉はそういう救いの正解、答えを示して、それに適したら合格、適さない者は不合格にするということなのでしょうか。

しかし考えてみれば、この2節以下の答えを完璧に守れる人間は誰もいません。すでに最初の言葉からわたしたちはつまづくのです。「完全な道を歩き」（2節）とあります。「完全」（ターミーム）という言葉は全く落ち度がないという意味の言葉です。落ち度のない人間はいません。また「心には真実の言葉があり」（2節）と続きますが、わたしたちは真実よりも偽りがあり、発する言葉といえば人を褒める言葉よりも中傷や嘲りの言葉の方が多いのではないのでしょうか。ここにある一つ一つの事柄が、わたしたちが神さまの御前に相応しくないことをむしろ明らかにしております。ということは、この第15編は、単に正解を示して合格か不合格かを判定するというよりは、すべての人間が御前に相応しくないことを示しているということではないのでしょうか。またもう少し踏み込んで、真の神さまを信じて神殿で礼拝をささげている、まさに一見何の落ち度もない人が実は神さまから離れているということがある。外面は合格しているように見えて、内面は御心に反している。御言葉はそういう人間の本質を鋭く見抜いているのです。そしてわたしたちに自己吟味させている。2節以下は確かに救いの正解、答えであり、これを守ることができるならその人は優等生なのですが、でもその優等生が危ない。聖書はそういう優等生の危険性を語っているのではないのでしょうか。

主イエスもまた優等生の危険を指摘されました。分かりやすいのはルカ福音書第18章にありますファリサイ派と徴税人のたとえです。ファリサイ派と徴税人の二人が神殿で祈っていた。ファリサイ派は心の中で祈るのです。「神さま、わたしは奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています」と。一方の徴税人は目を天に上げず、胸を打ちながら祈ります。「神さま、罪人のわたしを憐れんでください」と。この二人のどちらが神さまの御前に正しいか。主イエスはファリサイ派の人ではなく徴税人だと言われます。もう一つ紹介しましょう。福音書に金持ちの男の話があります。ある人が主イエスのところに来て尋ねます。「永遠の命を受け継ぐには何をすればいいのでしょうか」主イエスは「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え」と十戒の戒めを示されます。するとこの人は「そういうことはみな、子

どもの時から守ってきました」と言います。それに対して主イエスが「あなたに欠けているものが一つある。持っているものを売り払い、貧しい人に施しなさい。それからわたしに従いなさい」と言われると、この人は悲しみながら立ち去ってしまったという話です。

この二つの話で登場するファリサイ派の人も金持ちの男も言わば優等生です。今日の詩編の御言葉で言えば、神さまの御前に礼拝をささげる資格がある者であります。しかしこの優等生が相応しくないのです。それはどうしてでしょうか。金持ちの男はどうして立ち去ってしまったのか。「たくさんの財産を持っていたからだ」と書いてあります。この「財産」に象徴的なことは、自分の財、自分の力で救われると考えることにあります。そこに人間の高ぶり、奢りが生まれます。主イエスが十戒の戒めを示された時に金持ちの男は「そういうことはみな、子どもの時から守ってきました」と自信たっぷりに答えました。自分は合格者だ、優等生だと言わんばかりです。器用さゆえにそれができると思うのでしょうか。でもそうでしょうか。それはやがて器用に外面を取り繕うような行為になってしまうのではないのでしょうか。頭で考え行動できても心がそれに追いついていないという二面性がそこに生じてきます。これが偽善です。福音書で主イエスがファリサイ派や律法学者を批判しましたが、それはそういう二面性であり偽善であります。神さまはそこを見抜いております。それが優等生の危険ということです。

あるイギリスの神学者は「頭から心への旅は、わたしたちが知る旅の中でも最も長く、険しいものである」と言います。いくら頭で理解し行動できても、心まで到達していかなければ、それは表面的な行為、偽善となり、御前に正しいとは言えません。「頭から心への旅」そこが必要なのです。善き業がただ頭の中だけ、表面的な行動で完結してしまうのではなく、心からのものになっているか。表面的に正しく振る舞えばいいということではないのです。パウロは言います。「信仰を持って生きているかどうか自分を反省し、自分を吟味しなさい。あなたがたは自分自身のことが分からないのですか。イエス・キリストがあなたがたの内におられることが。」(Ⅱコリント13:5)キリストがあなたがたの内におられる。そのキリストの心がわたしたちのすべての行いの源です。

以前も紹介しましたが、この教会の長老に三宅俊輔という人がおりました。彼はかつてハンセン病の専門病院だった回春病院の院長を30年に渡って務めました。彼はこういう言葉を残しています。「順境にあっても、逆境においても、これがもしキリストならばどうするであろうかと考え、常にキリストの心を己が心とするなら、我らの生涯に失敗ということはない」「キリストの心を己が心とする」これこそが頭から心への旅であり、心からの行動を可能にする。洗礼を受けてキリストに結ばれることで「キリストがわたしの内に生きておられる」(ガラテヤ2:20)ようになるのです。ただうわべを着飾る生き方から、身も心もすべてを神さまにささげて生きる生活をそこに生み出します。

神さまは決してわたしたちが優等生であることを願っておられるのではありません。失敗だってしますし、少くも間違いだっていい。危ないのは優等生であろうとして、器用に振る舞おうとすることです。そこでは必ずほころびが生じる。わたしたちはそういう自分の確かに立つのではない。神さまの御前にわたしたちはどんなに頑張っても等しく罪人であり失格者なのです。けれどもキリストの贖いゆえに、ただ恵みによって御前に立つことを赦されました。この恵みに感謝して生きる時、すべての奢りは打ち砕かれ、わたしたちの思いはキリストと一つにされて、御心を現して生きるように導かれるでしょう。